

金研物語

先輩達との出逢い

Kinken Story

さんけん
ものがたり

むつみ

附属研究施設関西センター
正橋直哉

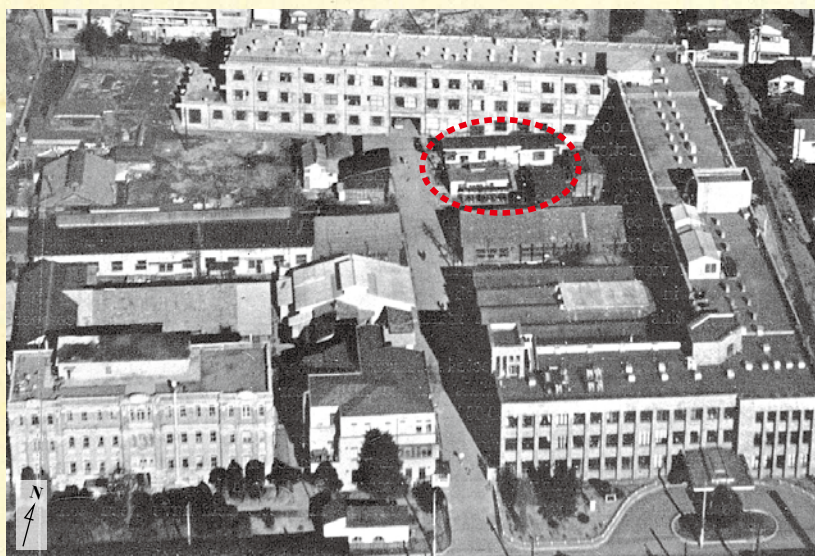


写真1: 昭和38年当時の金属材料研究所(昭和38年金研概要より)赤点線で囲った建屋の北側がむつみで南側が風呂場

「むつみ」という名に郷愁を誘われる方は多いのではないのでしょうか。「むつみ」は袋町通(丈夫小路)に面する旧三号館(工業化研究部)の南に位置し、東側の和室と西側の調理場を備えた平屋の建物でした。作業員が2、3名常駐し、名称は「作業員室、宿直室」だったようです(本稿は「むつみ」を使用します)。昼や夕方は集

まりの場として、夜は所員の宿直室として使用されました。本稿では、諸先輩からの情報と関係者による調査をもとに「むつみ」を紹介します。

金研は昭和20年7月10日の仙台空襲で、全焼の工場を含め1,022坪が焼失しました。当時を知る元職員の話しから、「むつみ」の建造は、昭和

20年代と考えられます。しかし金研には「むつみ」建設に関する資料は残存せず、諸先輩の記憶も断片的で正確な建設年は不明でした。そこで、本学史料館の協力を頂き、戦後の金研教授会や評議会資料を繙きます。昭和21年3月19日開催の教授会議事録では、「八. 懇談会の報告」の「2. 事務懇談会に就き三宅事務官報告」に、「ロ. 宿直室、小使室等の復帰を速やかに実施せられ度し」という記述があります。「宿直室、小使室等」が「むつみ」なのか、その中の一部なのか不明ですが、「むつみ」に関係する文言と考え以後の資料を追いかけます。

昭和21年11月1日開催の評議会議事録の「二. 復興状況に関する件」では、「2. 新たに計画中の低温充填室、研究室は本部に於いて工事契約を締結するも小使室、守衛室等は予算の都合上所名義で契約し来年度予算を見て契約の切替をなす予定」とあり、建設は所契約とすることが判

ります。そして昭和22年5月27日開催の評議会の議事録では、「〇一. 昭和23年度概算要求に関する件」において、「5. 小使室、宿直室等 72坪 建築費50万円、付帯工事費20万円」とあり、建設は概算要求であることが記述されています。さらに昭和23年4月21日開催の第一回評議会議事録では、「二. 慰労休暇及び自由研究時間(職組の申入)に関する件」において、「6. 宿直室、警務員室、作業員室及び警務室を遅くとも八月末迄に新築完成せられること」とあり、俄に建設が活気づき、「作業員室」という文言が登場します。また、その前文に、「5.『つどい』に専任の作業員(女子)一人を置くこと」とあり、「つどい」という文言が現れます。作業員を置くという記述から、「つどい」は「むつみ」の前身かもしれません。しかし、「つどい」はこの箇所にしか現れていないことから、「つどい」は建造済みの建物を指すのではなく、将来の建物名(仮称)ではないかと想像します。

昭和24年6月8日開催の第五回評議会議事録において、「四. 24年度新規予算に関する件」では、「宿直室及警務員、作業員詰所(官房費)632,600円 ほぼ確定」とあり、昭和23年8月までに宿直室等は建築されなかったことが判ります。同年7月23日開催の第七回評議会議事録において、「四. 建物建築について」では「作業員室20坪(要求36坪)が査定されたので高磁場研究室跡に又12坪を施設局出張所の東側の空地に建てることにしたい旨を石原所長から報告承認を得た」とあり、建築が正式に決まったことが判ります。ここで注目すべき点は、近接する20坪と12坪の二つの建物を記述していることです。これ以降、昭和32年ま

での教授会あるいは評議会資料に「作業員室」や「むつみ」の文言を見つけることができません。以上から、「むつみ」は昭和25年頃に建築されたと想像します。昭和35年4月の金研建物配置図には、むつみの場所はVII号館「宿直室及警務員作業員詰所」25坪760と、その南側には「蒸留水室」9坪801が掲載されています。従って、上記議事録に記述された20坪の建物が「むつみ」で、12坪の建物は風呂場と消防隊のポンプ小屋と考えられます。

「作業員室、宿直室」が、どういう経緯で、何時「むつみ」と名づけられたかは判りませんでした。しかし、むつみが「睦」という漢字と同音であることから、親睦の意企があることは想像できます。本来作業員や宿直者用の建物が、利用の過程で親睦の場に活用され、「むつみ」という名が付与されたとしたら、命名者は粋な方と慮ります。また親睦の場となった背景には、作業員の皆さんの「人となり」も忘れてはならないでしょう。一方、上述の「つどい」という名も、「むつみ」と通ずる意味があります。後付で命名されたであろう「むつ



写真2: 昭和60年むつみの西側(クロスカントリー大会)

み」と違い、「つどい」は最初から命名されていますので、何某かの意図を感じます。金研は金属の研究を先導する研究所として、所員には古今から相応の緊張が漲っていたと思います。こうした環境の中、戦後間もないこの時期に、期待に応える活気ある研究所を目指す上で、真摯に研究に勤しむことに加え、所員の結びつきの大切さを意識していたとしたならば、先達の見識には脱帽します。

上記文書は、「むつみ」と南隣の12坪の建屋を併せて、「作業員室、宿直室」と記載していますが、各建屋の使用目的は記述されていません。金研には以前、安全や労働管理を目的とした日直や宿直制度があり、日直は事務と技官と研究者が交代で週末の朝から夕方まで、宿直は事務と技官が交代で週末に泊まりこみました。このことから

「むつみ」は作業員の控室(居室)と宿直者の宿泊室として、12坪の建物は宿直者をはじめ所員の風呂として活用されたようです。昭和45年に完成した工場の建物に風呂場が設けられるまで、こ



写真3: 昭和57年当時の風呂場と大学院生



写真4: 昭和56年当時のバレーコート(東北大学史料館より)

の風呂は工場の技官を中心に利用し、宝ジェンヌのように先輩順に入浴したそうです。私が入所した昭和57年には、既に立てつけの悪い隙間だらけの建屋で、入口の右側にパワー不足で不穏な音を立てるボイラーが、上り框には洗濯機を備えた脱衣所が、そして奥には広くて深い浴槽がありました。このボイラーは某教授が「蒸留水製造装置」として購入したと先輩から教えられましたが真偽は不明です。冬は3つのシャワーを同時に使用すると湯温が下がるため、2つのシャワーを交代で使用し、順番が来るまで湯船に浸りながら、他愛も無い話しや、実験や論文のことを語りあったものです。今ならさし詰め「安全巡視」で改善命令を受けるでしょうが、幸い事故一つ起こさず、所員の憩いの場でした。

「作業員室、宿直室」の南側には附属工場がありましたが、昭和44年の取り壊し後はバレーボールコートとなりました。バレーボール大会はトーナメント形式でGW明けから7月末まで開催され、教員・院生・技官・事務、そしてサボテン会と称する秘書の女性陣、等のチームが参加しました。旧三号館に

囲まれた立地の良さも手伝い、親睦の格好の場となり、皆さん仕事と同じかそれ以上(?)に熱くなったと思います。連夜「むつみ」で祝勝会や残念会が催され、普段とは違う所員の姿を垣間見ることができました。バレーボー

ル大会が終了すると、ビアパーティが開催され、夏休み明けからはサッカー大会、硬軟テニス大会、ソフトボール大会、秋季運動会、駅伝大会、どんと祭、等々、息つく間もなく行事があり、格好のリフレッシュとなりました。こうした日常において、「むつみ」は行事の準備室であると同時に、お開きの場であり、イベントの想い出と連動して記憶に残りました。「むつみ」でのお開きを中座して入浴し、実験室を覗いてから宴会に戻るといふ、今から考えると恵まれた環境だったと思います。

本稿の執筆にあたり諸先輩からお話を伺い、当時の所員が「むつみ」と深く繋がっていたことを知ることができました。工場OBのW氏は金研入所の試験当日、宿泊場所として「むつみ」を用意され、初めて来

た仙台の一日目の晩を過ごしたそうです。研究部OBのM氏は、研究室の混迷を先輩職員と相談する場として、作業員が人払いをして下さった「むつみ」を活用したそうです。同窓の皆様もそれぞれが「むつみ」の思い出をお持ちと思いますが、残念ながら平成5年3月、新棟(現在の2号館、3号館)建設にあわせて取り壊されました。「むつみ」を知る関係者の多くが齢を重ね、また鬼籍に入った方もいらっしゃるため、本稿では正確な記述ができなかったことをお詫びします。詳しい情報や写真をお持ちの方がいらっしゃれば、情報企画室広報担当までご提供頂ければ幸いです。



写真5: 平成4年当時のバレーコート(手前)と風呂場とむつみ



写真6: 平成5年むつみの取り壊し(研友51号より)